—特集—

内子町が歩いてきた道、その道の先へ——

町並保存会が立ち上がって40年——
人と人とのつながりを大切にし、
伝統や内子らしさを大切にし、
今の美しい町並みがあります。
その町並みの魅力の一つは、家と家の間の路地「せだわ」。
町並み保存の歩みは、細く、長く、美しい、
そんな「せだわ」の姿と重なります。
この先にどんな景色があるのか、
不安を感じながら、ワクワクしながら、歩んできました。
今回の特集では40年前の町並みと、今の町並みの姿から、
内子町における町並み保存の意味を改めて考えます。

写真：本芳我家住宅と大村家住宅の間のせだわ

40年前、古いものを残そうと思う人なんか、ほとんどいなかった。

「町並み保存なんか何になる」

約40年前に八日市護国地区で始まった町並み保存運動——
その重要性が理解されるまでには、大変な苦労がありました。
初代町並保存会長を務めた大川さんの話を聞きながら、
当時の町並みの様子と保存の取り組みを振り返ります。

「こんなところ、残して何になる——」。保存会の初代会長を務めた大川泰助（たいすけ）さんが、当時を思い出しながら、ゆっくりと話し始めます。

内子町八日市護国地区で町並み保存運動が始まったのは、昭和40年代後半。町内在住の画家・井門敬二（けいじ）氏が、その保存を提唱したのが始まりでした。

大川さんは「商店街は元気だったけれど、ここでは商売しても、ぜんぜん売れんくらい廃れた通りやった。そんだけ経済状況が悪かったということ。町並み保存が始まる前は軒下に農機具をおいたり、壁が剥がれ落ちたりして、きれいにはほど遠いまちだった」と振り返ります。古いものは壊され、新しいものが次々とつくられていた当時の日本で、その波に乗れず、取り残された八日市護国地区——。「こんなところ、残して何になる」と大半の人が思っている時代に、大川さん自身も何も分からないまま、新たな取り組みが始まります。

妻籠の町並みを目指して

「役場の岡田文淑（ふみよし）さんに誘われて、妻籠（※）へ行ったのが運の尽き」と笑う大川さん。先進地を2回ほど視察したあと、保存会をつくる話になり「若い者がやらんと、いけまいが」と、初代会長に指名されました。

町並み保存という言葉自体が知られていない時代で、保存会設立当初は大変でした。「地元が盛り上がったのではなく、行政が主導した組織。役員は各行政区から2～3人を割り当てたので、使命感のある人ばかりではなかった」と話す大川さん。住民には誤解する人も多く、「町に財産がとられる」とか「今のうちに家を建て替えた方がいい」などのうわさをよく耳にしたそうです。

「町並み保存に教科書はない。どうすれば妻籠のようになるか分からない。だったら自分たちにできることを、まずしよう」。そう考えた大川さんは、町長自身に説明会を開いてもらうなど、地元の理解を深めることや、行政と住民をつなぐことに力を注ぎました。

全力でぶつかった10年間

地域住民がまとまり始めたのは、広島大学の鈴木充（みつる）教授の調査報告書が完成した頃。価値のある町並みとの報告があり、機運が高まりました。多くのメディアに取り上げられ、専門家に高く評価されたことも運動を後押ししました。

保存会の設立から10年も会長を務めた大川さんは「家族にまで反対されたこともあったが、まちが良くなることを信じて最後までやってみたかった。住民と行政が力を合わせて、どうにか今日のような町並みになった。子どもたちが町並みをどうするかを、どうのこうのは言えない。でも私たちの頑張りに胸を張りたい」と語りました。

昭和30年代頃の護国地区の様子

3

2

1

1_町並み保存運動が始まった昭和40年代後半。まだ電線や看板などがあり、雑然としている　2_昭和50年代の護国。左上にコンクリート造の新築の内子中学校が見える　3_当時は壊れた壁をトタンで覆っていた

※妻籠 ― 長野県南木曽町の町並み。日本における町並み保存運動の発祥地

信じて進み始めた道。
「最後の最後まで、やってみろ」
そう言ってくれる人がいたから、
踏ん張って前に進めた——

八日市周辺町並保存会
（現八日市護国地区町並保存会）
初代会長　大川　泰助（たいすけ）さん

積み重ねて40年——
町並み保存の今。

町並みを守ることは、暮らしを守ること。
いい地域にするためには苦労もある、
地域を思う皆さんの**心意気に感謝**したい——。

八日市護国地区町並保存会
会長　丸山　昇（のぼる）さん

八日市護国地区は昭和57年、全国で18番目となる「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。今では「まちづくり先進地」として全国的に知られ、国内外から観光客が訪れる県内有数の観光地となっています。

八日市周辺町並保存会が立ち上がってから、今年でちょうど40年——。現在は名称を八日市護国地区町並保存会と変え、精力的に活動を続けています。丸山昇会長に、町並み保存の今を聞きました。

保存運動は内子町の歴史

「内子町の歴史を語るときは、町並み保存運動は外せない。私たちは、それを誇りにすると同時に、この大切な歴史資源を守りながら、きちんと次の世代に渡さなければならない」と話す丸山さん。

今では町並み保存の意識が地域住民に浸透。日常的に通りの掃除をしたり、玄関前を花や緑で飾ったりする人が多くなりました。40年前には想像もできなかった美しい景観が、人々の目を楽しませています。丸山さんは「大変だけど、多少は地域のことや周りの人のことを思って動かないと、まちは良くならない。それはどこの地域でも同じ」と力を込めます。

見えてきた課題

今の保存運動を支えるのは、ほとんどが70歳以上の人たちです。運動を始めた当初は、子どもたちが戻ることを期待していましたが、思ったほどの成果はありませんでした。丸山さんは「予測よりも空き家は増えていないが、若い人が住まないのは、建物の規制があるのも理由の一つ。守ることは大切だが、担い手がいなければ活動自体が続かない。どのような形がいいか、若者を交えて考える時期がきている」と危機感を募らせます。一方、「最近は若者の関心や動きが見られるようになった」と期待も——。

「商売のルールづくりも必要」と加える丸山さん。「みんなでつくってきた町並み。自分だけ儲ければいいという考えで、町並みの景観や観光客の気持ちを害すのはよくない。住む人も来る人も気持ちいいことが、必ず町全体のためになる——」。厳しく優しい眼差しで、町並みの将来を見据えます。

6

4

1

2

7

5

3

1、2_訪れる人への心配りが、町並みをきれいにする　3_町並みの宿。奥に誘われるような内観　4_地元の人にとっては、いつもの散歩道　5_縁側の座布団に座って談笑する観光客　6_5頁の写真の現況　7_多くの観光客が訪れるまちに——

町並みをどう思っているのか　ここで育った若者に聞きました

大好きな町並み、離れても大切にしたい

門田さやか（しょうこ）さん（28）

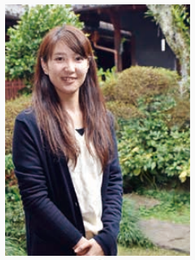
Interview①

町並みが好きで、住んでいても不便さを感じたことはないです。周囲がきれいなので、散歩をしていても「ほっ」とします。亡くなった祖父も町並みが好きで、いつも家の前に座って、楽しそうに観光客や小学生たちとあいさつしたり、話したりしていました。

観月会やいもたきなど、町並みのイベントは、素敵な思い出です。準備をする皆さんには、いつも感謝しています。私は結婚して、４月には別の町に移り住みます。ここを離れるのは寂しいですが、いつまでも変わらないよう応援したいです。

ふるさとの町並みは心の支え、そして誇り

芳我　祥子（しょうこ）さん（27）


Interview②

自分のまちのことを話せる素晴らしさは、学生時代に内子町を離れてから気付きました。田舎だけど、古い町並みがある素敵なふるさとは、私の心の支えであり誇りでした。本当の日本人の心が、ここにはあると思います。

先日、町並みの明治の婚礼に参加して、楽しかったです。これからは、もっと地域のイベントに参加したいと思いました。小さい頃から町並みで育った私たちには、地域の皆さんの努力は伝わっています。内子町の子どもたちにも、町並みでの思い出をたくさんつくって、町並みを好きになってほしいです。

町並みは思い出の場、そして大切な学びの場

市兼　正則（まさのり）さん（38）

Interview③

小学生のときから、左官をしていた父の仕事を手伝っていました。自分も自然と父と同じ仕事をするように——。町並みや重要文化財の本芳我家を修理した経験などから、松山城の修復にも携わりました。小さい頃に遊んだ思い出の場が、自分たちの手でどんどんきれいになるのは不思議な感覚で、やりがいがあります。

左官は仕事が減り、若い人が学ぶ場がありません。町並み保存地区は歴史環境を伝えると同時に、職人を育てる場でもあります。この町並みの大切さを、私自身も若い人に伝えていきたいです。

1

2

3

1_浴衣で観月会を楽しむ門田さん　2_明治の婚礼に、家族で昔の町民に扮して参加した芳我さん　3_松山城の屋根の修復をする市兼さん

町並みに恋した若者にインタビュー①

都会が憧れる内子の町並み

山内　大輔（だいすけ）さん（＆馬場宏介（こうすけ）さん、白砂孝洋（たかひろ）さん）

友人の空き家探しを手伝っていて、見つけた物件に自分が一目惚れしてしまいました。以前から内子町にゲストハウスがないのが不思議だったので、ここならできるかもと直感――。東京の友人、馬場くんと白砂くんなどに声を掛けて、ゲストハウスを中心としたプロジェクトを進めています。

二人とも「東京ではなかなか出会えない素敵な空間。心が落ち着く」「一つ一つの暮らしを丁寧にしているのが実感できて、都会にない暮らし方に憧れる」と言っています。ここに活動拠点をつくり、東京と内子を行き来することで、自分たちの仕事への刺激や新しい発想につながることを期待しています。

地域おこし協力隊の活動の中で、小田地域の良さを多くの人に知ってもらうには、内子の町並みなどに拠点が必要と感じました。ゲストハウスでは「人と人とをつなぐ旅」を提案する予定です。ガイドブックにも載っていない内子町の魅力を発信して、内子を遊びつくす観光客をたくさん増やせるよう頑張ります。

1_プロジェクトの拠点となる森脇初子（はつこ）さんの家の前で井戸端会議　2_近くの喫茶店で打合せ　3_ゲストハウスの建築模型で具体的な計画を練る　4_左からグラフィックデザイナーの馬場さん、地域おこし協力隊の山内さん、建築士の白砂さん

1_小河卓也さんと小野翠さんの結婚式。約100年前に行われていた花嫁行列を再現　2_町並保存会のメンバーなどが昔の衣装に扮して花嫁行列を盛り上げる　3_木蝋資料館上芳我邸を会場にし、親族や住民、観光客の前で永遠の愛を誓う　4_町中で二人を祝福した

町並みに恋した若者にインタビュー②

特別な結婚式を、町並みで――

小野　翠（みどり）さん（＆小河卓也（たくや）さん）

私も夫も内子町役場職員で、私は町並保存センターに勤務して５年目になります。ずっとお世話になっている町並保存会の皆さんに、感謝の気持ちを伝えたくて、11月５日に町並みで式を挙げました。

木蝋資料館上芳我邸の新しい使い方の提案をしながら、みんなで楽しめる式にしたかったので、100年前の婚礼の再現を提案しました。花婿が花嫁を実家に迎えに行く「嫁迎え」と、花嫁が婿家に向かう「花嫁行列」を行い、近所の住人などが行列を見に表へ出てくるという想定です。みんな積極的に協力してくれて、力の入った扮装（ふんそう）や演出で、想像以上に盛大な式にしてもらいました。両親は「あんな素晴らしい式は初めて」と感動していました。夫も「町並み以上に、大切なものを守っている人たち」と言っています。素敵なまちで仕事ができていると、私自身も改めて感じました。

私が思う町並みの魅力の一つは、住む人の温かさ。式を挙げて、今まで以上に町並みに住みたい気持ちが高まりました。ずっと守りたい暮らしと温かさです。

優しい光が町並みを包んだ日

商店街と町並みをつないだ「町並み幻灯祭」

「わーっ、きれい」「すごいね」町並みを歩く人々から、感嘆の声が聞こえてきます――。

この日、11月12日は内子まちづくり商店街協同組合や八日市護国地区町並保存会などが共催した「第1回町並み幻灯祭～しっとり灯り道～」が開かれた日です。町並みの白壁に投影された雪の結晶や桜の花びら、きれいな紅葉などに子どもたちは大喜び。道行く人も自然と笑顔になっています。

商店街の笹祭りで25～27年に開かれた「光の切り絵」を町並みで行ったもので、笹祭りと同じく愛知県出身の光の切り絵作家・酒井敦美（あつみ）さんが協力してくれました。町並み保存地区の住民も積極的に協力。コンセントや敷地を貸してくれたり、通行制限を受け入れてくれたりと、多くの人の思いや優しさがつながって、こんな素敵なイベントになりました。

実行委員長の大西啓介（けいすけ）さんは「互いの強みを生かせば、こんな素晴らしいイベントになるのかと驚いた。これをきっかけに、また何か一緒に取り組めたらいいですね」と話しました。

3

2

1

【舞台の裏側】
1_プロジェクターなどを設置するため足場を組む商店街の有志　2_酒井さんの指揮で、設置箇所などを確認　3_実行委員長の大西啓介さんと、町並保存会長の丸山昇さんのツーショット

4

2

3

1

1_子どもたちが描いた行灯「夢灯り」が並ぶ会場に、酒井さんの作品「やさしいたね」とシンガーソングライターの池田綾子さんの温かい絵と音楽が流れる　2_空から降って来る光の模様を取ろうとする子どもたち　3_約1,500人が「町並み幻灯祭」を見に、町並みを訪れた　4_重要文化財の大村家住宅と本芳我家住宅も、きれいな光の絵に包まれた

町並保存会と商店街、大勢の笑顔と歓声――
みんなでつくった作品が「町並み幻灯祭」です

八日市護国地区の町並みは、建築家を目指していた学生の頃から憧れていて、何度も足を運んだ場所――。こんな素敵な町並みで「光の切り絵」を輝かすことができて、私自身が感謝と喜びの気持ちでいっぱいです。

今回の催しが実現したのは、内子本町商店街の笹祭りで「光の切り絵」を3年間、実施していたから。「いつか町並みでしたい」という言葉を、実行委員長の大西さんが覚えていてくれて、「自分たちも町並みで見たい」と企画してくれました。

今回の「町並み幻灯祭」は、私が行う野外幻灯の中では最大の規模になりました。普段の倍くらいの作品数です。これまで手伝ってくれた商店街の人たちのサポートがあったので、挑戦することができました。

私の作品展は地域の人たちと一緒につくるものです。見てもらえるのもうれしいですが、展示に関わった人たちとの絆や経験が一番の喜びです。商店街と町並保存会が協力してイベントをしたのは、初めてのことだったと後で聞きました。図ったことではないけれど「今までになかった協力関係が自然にできた」と言われ、感激しました。みんなで協力した事例として、次のステップの何かのきっかけになればいいですね。

光の切り絵作家
酒井　敦美（あつみ）さん

平成12年頃から四国の旅のスケッチや個展活動を始める。平成20年に高知県佐川町で初めて、舞台の影絵を野外に映す「野外幻灯展」を開始。現在は、光を当てると絵の表情が変わる「一画二驚」と「野外幻灯」を中心に、各地で展示会を行っている。

「やさしいたね～♪Happy Birthday♪～」

星になった友人を思う中で、生まれた物語。その友人は天に旅立つ2日前、最後になった電話でも「今日もあっちゃんの絵から、元気をもらったよ」と酒井さんを励ましていたそうです。酒井さんは「彼女の優しさに生きる力をもらった。今度は私が、その『やさしいたね』をみんなに届けたい――」、そんな思いを作品に込めました。

①羽が傷ついたチョウチョに自分の花びらをあげて助ける、やさしい花。次々に、自分の花びらで困っている子を助けます

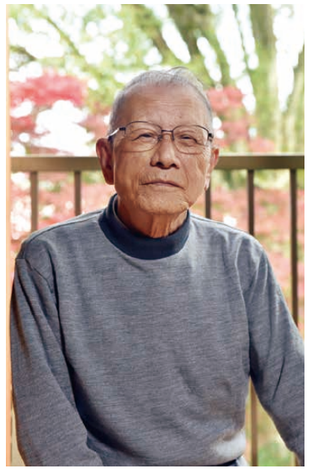
②自分の歌がみんなに届いているか悩む小鳥には、「いつも元気をもらってるよ」と最後の花びらを渡します

③花は「ありがとう」の種を大地に降り注ぎながら、空に昇って行きました。春になると、その種はたくさんの花を咲かせ、やがて地球いっぱいに広がって行きました。

まちづくりに終わりはない。細く、長く、美しく、

信じた道を、これからも——

40年間、一貫したまちづくりをしてきた八日市護国地区——
振り返ると、そこには素晴らしいまちの歩みが刻まれていました。
いつかバトンを渡す子どもたちのために、信じた道をこれからも進みます。



地域振興アドバイザー（元内子町役場職員、初代観光係長）
岡田　文淑（ふみよし）さん

まちづくりはいつまでも続く
八日市護国だけで終わらせないで、
各地域の「地域らしさ」を磨いてほしい——

高度経済成長による各地の都市化は、その地域の伝統や「らしさ」を壊し、現代化された画一的なまちを生みました。内子町の町並み保存運動は、地域の暮らしを見つめながら、生きた町並みを守るもの——。観光客のためのまちづくりではなく、地域に住む人のため、内子らしい暮らしを守るための運動ということを忘れてはいけない。単に建物を保存することではないのです。

石畳地区などの村並み保存も同じです。その地域の暮らしが魅力。私たちにとっては普通の農村のたたずまいが、都会の人にとっては、失ってしまった美しい営みや風景なのです。いまだに田舎コンプレックスを持っている人もいますが、田舎にこそ真の豊かさがあるのです。

企業誘致を最優先にしていた時代に、歴史がいかに大切な観光資源であるかを認識した内子町のまちづくりは、素晴らしいです。全国のどの観光地も、自然資源があるところろ以外は歴史遺産の観光。歴史にまつわらない観光資源なんて存在しません。40年間この内子町が歩いてきた道を振り返ると、いい資源ができたなと誇りを持てます。

地域らしさを残すことで、他の地域と違う個性が生まれ、自分たちも訪れる人も美しいと思える「景」が生まれます。「町並み保存」という言葉は、八日市護国地区のためだけのものではありません。どの地域でも大切にしてほしい言葉です。その考え方が内子町全体に広がり、まちぐるみで地域の魅力を磨いてほしいと願います。

2

3

1

1_往時の隆盛を物語る「本芳我邸」　2_「当時は荒れ放題だった上芳我邸をみんなで掃除した」と岡田さん
3_石畳地区のみなさん。地域総出で屋根付き橋の屋根の葺き替えなどをしている

「きれいな町並み——」
今は当たり前のように、そう評価される八日市護国地区の町並みですが、そこには40年以上にわたり保存運動を続けてきた人々の思いや、地道な活動の積み重ねがあります。その運動は建物や景観を守るだけでなく、人々の暮らしや「内子らしさ」を守ってきました。そして村並み保存の活動に広がり、内子座を保存するという決定も後押しました。若者や子どもたちが誇りに思う、内子町の「顔」にもなっています。

岡田さんの言葉をお借りすると、町並み保存とは「生活者にとってのアイデンティティ（存在証明）を守ること」。地域の存在を証明する個性がないと、どの地域も全く同じ。地域に魅力がないため、住民の連帯感や郷土意識もなくなり、観光という言葉さえもなくなるかもしれません。

このまちが美しいのは、歴史や文化を継承しようとする地域の人々の姿があるからです。そして、その美しい姿が、この「道」の先を創っていくのでしょう——。